



最強

ジヤイナント
キリンケ

喰いの

NOZOMI KOTA

望公太

Illust. へいろー

gigantkilling
DARKHERO

ダークヒーロー

And, he vowed to take
revenge on the world.



少年にはなにもなかった。

選ばれし者ではなく、持たざる者だった。

生まれながらの落第者で、笑えるほどの敗北者だった。

どんなに手を伸ばしても届かない。

^{あが}足掻いても足掻いても報われない。

頂点に立つに相応^{ふさわ}しき血筋に生まれ、『最強』の名を恣^{ほしいまま}にする存在から徹底した指導を受

けたにもかかわらず——凡人の域にすら達しなかった。

どうしようもないまでに才に恵まれなかった少年は、とうとう劣等の枠から抜け出すことは

できなかつた。

運命はあまりに無慈悲で、世界はあまりに残酷だから。

少年は己^{おのれ}の無能を嘆き、無責任な周囲に絶望し、非情な運命を呪^{のろ}い——

そして、世界に復讐することを誓った。

凡人は天才には勝てない。

弱者は強者に勝てない。

そんな必然の理へと反旗を翻し、不安定に秩序だった世界を虚仮にする。

残りの生の全てを、ただ復讐のためだけに費やすことを決めた。

そのためならば、手段は一切問わない——

+

『常夜島』

太平洋にボツンと浮かぶ人工の島は、軍事拠点だった頃の名残でそう呼ばれていた。

半世紀ほど前までは死と闘争で溢れ返っていた島も、今では様々な企業による再開発が進み、多くの人間が暮らす海上観光都市として賑わっていた。

その島の東端には——広大な敷地面積を誇る学園がある。

島面積のおよそ百分の一を占める巨大学園は、名を私立聖海学園という。

有能な攻魔騎士を育成するために作られたその学園は——本日、熱狂の始まりを迎えようとしていた。

『——さあ！ 今年も血沸き肉躍る季節がやってきましたよ、ご学友の皆様！ 全世界

の学生攻魔騎士が覇を競い合って頂点を決する武の祭典——「祓魔祭」！ その出場選手を決定するための校内選抜戦——その予選が、本日よりスタートです！

『わー、ぱちぱちー』

『悪魔との戦争が終結して早や半世紀……記念すべき戦後五十周年となるこの年に、校内選抜戦を勝ち抜いて、我が校の代表者となるのは果たしてどの生徒なのか!? あ。ちなみに、今日の第四闘技場の実況は不肖私、二年、文倉燕が務めさせていただきます！ 解説は……聖海学園序列六位にして、我が校が誇る大人気アイドル、「かみゅーん」こと、神峰弓様に来ていただきました！』

『ちょ、ちよつと止めてよ、燕ちゃん。そういうの恥ずかしいからさ……』

実況席に座る二人の女子の声が、円形の闘技場へと響き渡る。

潮の匂いを孕んだ風が優しく通り抜ける観客席には、満員とまではいかないが、それなりの数の生徒が座っていた。

『思いの外生徒が多いですねー。上位序列入りが出ない予選なんて、席の四分の一も埋まればいい方なんです。これはやはり、今夏歌手デビューも決定している「かみゅーん」の美声を聞こうと、集まった者が多いのでしょうか？』

『もうっ、違うでしょ、燕ちゃん！』

『あはは。失礼致しました。そうですね。「かみゅーん」ファンの方もいなくはないようです

が……多くの方の目的は、やはり彼女の方ですね」

実況者の言う通り、すり鉢状の観客席に集まった生徒達が向ける視線は、アリーナの中央に立つ一人の少女へと集まっていた。

美しい少女である。

進む雷光を思わせる金色の髪と、凜とした眼差し。まだどこか幼さが残る顔立ちだが、ピッチリとしたG Pスーツに包まれた肉体は女性特有の起伏が激しく、なんとも言えない妖美さを醸し出していた。

攻魔騎士同士が武器を手に戦う格闘競技——『ソードウォウ』の公式規定に則り、彼女の体では五つ『的』が展開済み。

右手、左手、右足、左足、そして胸部。

脇に下げた右手には、華美な装飾が施された細剣が握られている。これもまた大会規定に則った、六連の魔機剣であった。

『閃雷の騎士』リザ・クロスフィールド！ 今年聖海学園に入学した話題の新入生です！ みなさんもご存知の大企業——クロス社のご令嬢にして、昨年度の欧州中学生大会の覇者！ 鳴り物入りのスーパールキーの初戦に、多くの生徒が興味津々のようですね』

「……ふん。くだらない」

華やかな美貌を誇る少女——リザは、大音量で語られる自分の情報に対して、心底つまら

なさうに鼻を鳴らした。

「経歴や生い立ちなんて、なんの意味もない。戦場に立つ以上、勝った負けただけが全てなんだから」

一人呟いた後、対戦相手の男へと視線を移す。

「聞いたわよ、あんた——早漏なんですってね？」

その口元には、茶化すような笑みがあった。

「なんでも、全然保たなくて、すぐに終わっちゃうとか……。はん。男のくせに情けないわね。棄権するなら今のうちよ？」

「……………」

挑発を受けても無言を通すのは——オセロのような風体の男であった。

全身は黒ずくめ。五つの『的』が輝くG Pスーツも、手に持つ六連の魔機剣も、黒系統の色で統一されている。

対して頭髮は——白。

色素という色素が抜け落ちてしまったかのような、白い髪。どこか薄汚れた印象を受ける白濁した髪色は、燦然と煌めくりザの金髪とは対照的であった。

白と黒のコントラストが際立つ風貌の男は、そよぐ風に白濁した長い髪を揺らしつつ、幽鬼の如く戦場に佇んでいた。

『大注目のクロスフィールド選手の対戦相手は……三年生の阿木双士郎選手です。えーっと、阿木選手には関しては一切の情報がありません。というのも、彼はこの三年間、一度として戦っていないからです』

『一度も?』

『はい。公式非公式含めて、一度も。校内選抜戦にエントリーしたのも、最終学年となった今回が初めてですね。というか彼の場合、攻魔騎士としての才覚や技術の問題で、選手として戦えるレベルに達していないようです……』

『ふうん』

『適合者資質は、最低のカテゴリE。授業の成績も散々。基礎技能であるフレアの発動時間があまりにも短いせいで、一部では「早漏騎士」と揶揄されているとか……』

『あー、聞いたことあるかも。三年に、そういう先輩がいるって』

『こう言ってはなんですが……阿木選手は、おそらく思い出作りが目的かと思われます』

『なるほどねー。でも、思い出作りだとしても精一杯頑張っただけで欲しいなあ。最後まで諦めなければ、奇跡が起こるかもしれないもんね』

『そうですね。阿木選手にも、どうにか奮闘して欲しいところです。スーパーキー相手に、』

『的』の一つでも破壊できたら立派なものだと思います』

実況席の二人は、まるでリザの勝利が確定しているような発言を繰り返す。

そう考えているのは彼女達だけではないだろう。

会場にいる者の大半が、リザ・クロスフィールドの——いざれ自分と戦うかもしれないライバルの初戦を見るべくして集まった者達だ。

すでに決している勝敗など、誰も興味はない。

『ふん。思い出作りだかなんだか知らないけど、私はそういう甘ったれた考えで戦場に立つ奴が一番嫌いなよ』

攻撃的に言い放ち——そしてリザは、体内で練り上げた魔力を一気に解放した。

黄金に輝くオーラが、彼女の全身を包み込む。

頭から爪先まで魔力が行き渡り、肉体を構成する全ての細胞が活性化。体外に放出した魔力は、淀みなく体表を循環する。

『おーっとクロスフィールド選手、なんと魔弾を消費せずに魔力解放の状態となりました！全国レベルでは必須技能と言われる、魔弾不使用のフレアですが……さすがは欧州の覇者、なんなくやってのけてくれます』

『綺麗なフレア……。』攻魔騎士はフレアに始まりフレアに終わる」とも言われるけど、今の一連の魔力の流れを見ただけで、彼女が一流だっということがよくわかるね』

体内で渦巻く魔力を動力源とし、体外に迸る魔力を鎧と化す。

悪魔の到来より世界に溢れた魔の力と適合できた人間——適合者にのみ許された、攻防一

体の戦闘技法。それこそがフレアである。

「この国にはこういうことわざがあるらしいじゃない？ 『獅子は兎を狩るにも全力を尽くす』とか。ふふん、いい言葉ね。私も、相手がどんなに雑魚ぞごだろうと決して手を抜いたりほしくないわ。けちよんけちよんに叩たたき潰つぶしてやるから覚悟しなさい！」

「……………」

白髪はくはつの男は、やはり口を開くことはなかった。

やがて時刻となり、試合開始のブザーが、開戦の合図を告げる。

聖海学園一年・リザ・クロスフィールド。

聖海学園三年・阿木双士郎。

双方にとって高校デビューとなるその戦いが——全ての始まりだった。

これより世界は、阿木双士郎という名の『最悪』を知る。

『最弱』で『最低』な、『最悪』の存在を思い知らされる。

高等学校最高学年の夏。

『ソードウォウ』高校生世界大会——『祓魔祭カニバル』に出場するための、最初で最後の機会。

この一夏のためだけに、彼は全てを賭けてきた。

出来ない劣等生と蔑さげすまれようと、『早漏騎士』と陰口を叩かれようと、物言わぬ木偶でくの坊のような学生生活を送りながら——虎視眈眈こしたんたんと牙を研ぎ続けてきた。
我が物顔で闊歩かつぱする大物共の喉元のどに、深々と突き立てるための牙を——

『ソードウォウ』高校生大会の個人戦では、競技時間は十五分と定められている。

時間内に互いの『的』を破壊し合い、試合終了の時点でより多くの得点を得た方が勝者となる。両手両足の『的』は一点で、胸の『的』は五点。同点の場合はサドンデスとなり、それでも決着がつかなければ判定勝負となる。

リザ・クロスフィールドのデビュー戦も、当然十五分の制限時間で行われたが——結果から言ってしまうえば、試合は十分も経たないうちにケリがついた。

『バ、完全試合……』

震えた実況の声が、闘技場に響き渡る。

観客席上部にあるスコアボードは、選手の『的』とセンサーで繋がっており、両者の得点状況が随時表示される。五芒星に似た図形の一つ一つが『的』と連動しており、『的』が破壊されると灯りが消える仕組みだ。

現在スコアボードでは、片方の選手の灯りが五つ全て消え、そしてもう片方の選手の灯りは五つ全て灯ったままだった。それが意味することは——

『なんと、なんと、勝者は……阿木双土郎選手。自分の「的」を一つも破壊させずに、クロスフィールド選手の五つの「的」を全て破壊……。いわゆる、完全試合です……。しかし、これはいつたい……』

『な、なんて言えばいいのかな……』

闘技場は静まり返っていた。

思いもよらぬ結末に、まるで予想していなかった大番狂わせに、誰一人としてまともな感想を口にすることができない。試合を見た全ての者が深い混乱に陥っていた。

しかし混乱の度合いで言えば——記念すべきデビュー戦で完全試合を喰らってしまったスパーボールキーが陥った混乱は、観客達の比ではなかった。

(負け、た……?)

結果だけ見れば、完全敗北以外のなものでもない。

しかしリザは自分の敗北を、まるで受け入れられずにいた。

(負け……? え……? なにこれ……? こんなことって……)

わからない。

なにがなんだかわからない。

自分がなぜ敗北したのか、全くわからない。

未熟さと傲慢さ故に敗北を受け入れられないわけではなく——戦場でなにが起こったのか

全くわからなかったのだ。

気がついたら負けていた。

負けた、という実感がまるでない。悔しさも惨めさも湧いてこない。試合終了のブザーも、スコアボードに表示された対戦結果も、なにもかもが他人事のように感じる。

(おかしいわよ、こんなの……)

もしも——対戦相手の男が実はとんでもない強者で、今までずっと隠していた実力を発揮して自分を圧倒した、という話ならばまだ納得できる。

だが、そうではない。

相手の男は——決して強くはなかった。

彼が強かったわけではなく、リザが——

『いやー……なんというか、奇妙な試合でしたね……。パツとしないというか、見栄えしないというか。阿木選手は、フレアのために一発魔弾を使っただけで、クロスフィールド選手に至っては、魔弾を一発も消費していません。純粹な体術だけの決着となったわけですが、その体術にしても……』

『うーん……リザちゃんも、初戦だから緊張してたのかな？ 明らかに動きが悪かったね。ともじゃないけど、欧州の中学生覇者とは思えない』

そう。相手が強かったわけではない。

リザが——弱かったのだ。

普段通りの動きを一切できず、困惑と動揺が解消せぬうちに五つの『的』を破壊されてしまった。欧州のU15の大会で優勝を手にした彼女の實力は——国際攻魔騎士管理機関『メルクリウス』より『閃雷』の二つ名を授かった彼女の真価は、なに一つ発揮することができなかった。

まるで、悪い夢でも見ていたような——

「……えっ？」

ステージに跪いていた彼女は、ふと顔を上げる。

自分に勝利した阿木双士郎が、すぐそばまでやって来ていた。白濁した白髪の際間から覗く眼が、リザを見下ろす。

「な、なによ……？」

「……ク、クク、ククク」

男の体が、徐々に震え始める。

ずっと沈黙を保っていた口から零れたのは——笑い、だった。

「ククク……ククツ、クカカカカカカカカカカカカカカカカカア——ッ！」
哄笑。

静まり返る闘技場の中心で、彼は一人、声を上げて笑う。

大口を開け、犬歯を剥き出しにして、腹の底からゲラゲラと大笑いする。

この世の全てを見下し、蔑み、嘲笑するかのよう——

「クカカカカカッ、ククク……どうだよ、リザ・クロスフィールド。早漏だって馬鹿にしてた男にイカされちまった気分はよオ？」

ようやく笑いを収めたところで、双士郎は酷く愉快そうに言葉を紡いでいく。

「これが十年に一人の天才と謳われた『閃雷の騎士』かよ？ はっ。大したことねえなあ。期待外れもいいところだ。強い弱い以前に、勝負つてもんを根本的にわかっちゃいねえ。ただの雑魚じゃねえか」

「なっ!？」

失礼極まりない言葉の連続に、リザはキッと相手を睨みつけた。

「ざ、雑魚ですって!？ こ、この私が……」

「ああ、雑魚さ。雑魚で不服なら……まあ、カモつてとこかな？ 簡単に勝ち星を提供してくれる、実に美味しいカモだ。頭の方も鳥並みにスカスカみてえだしな。クク。栄養全部デケえ乳に行つてんじゃねえのか?」

「っ!？」

品のない罵倒に、カア、と頬が熱くなる。リザは跳ねるように立ち上がり、相手へと詰め寄った。



「ふ、ふざけんじゃないわよ！ もう一回、もう一回勝負よ！ こんな……ありえない！ この私が、あんたみたいな早漏に負けるはずなのよ！ 絶対なにかの間違いだわ……ちゃんと本気で戦えば、今度は——」

「もう一回？ 今度？ クク。どこまで甘ちゃんなんだかな、このお嬢様は？ 生きるか死ぬか、勝つか負けるか……真剣勝負の世界じゃ、泣きの一回は存在しねえんだよ。勝負をナメるのも大概にしな」

「だ、だって——」

「いつまで恥を重ねる気だよ、馬鹿おっぱい。これ以上口を開けば開くだけ、自分が言い訳し
かできねえ無能だつて周囲にアピールするようなもんだぜ？」

リザは口を嚙み、ギリギリと歯を食いしばった。

なにも言い返せなくなった彼女を見て、双士郎はさらに笑みを深くする。

「カカカカッ！ 無様だねえ、リザ・クロスフィールド。てめえもいろいろと事情抱えて戦つてたんだろが、この一回の敗北で全てがパーだ」

勝者は敗者を、ひたすらに罵倒し続けた。

「お前は強い。俺よりもはるかに強い。だが——今日勝つたのは俺だ」

そんな勝利宣言を述べた後、双士郎は再び、堪え切れんとばかりに笑い出す。闘技場全てに響き渡るような大音量の嘲笑を撒き散らしながら、彼は姿を消していった。

残されたりザは、悪魔のように唾う男の背を、呆然と眺めることしかできなかった。

永い永い戦いがあつた。

攻魔騎士と悪魔の、血で血を洗う凄惨な戦争。

『時の悪魔』

『東からの災厄』

あるいは、ただ単に『悪魔』

太平洋の中心を縦断する日付変更線——時を分かつ線より西に向かつて現れる異形の化け物達は、そんな風に称された。

時を隔てる線より召喚される悪魔達は、世界各地に破壊と混乱をもたらし、理解不能の災厄として人々を恐れさせた。

そんな悪魔達から人類を守るために戦つたのが——攻魔騎士と呼ばれる者達。

攻魔騎士——全人口の一割と言われる適合者の中で、悪魔に対抗できるだけの戦闘技能を身につけた者の総称である。

東方より訪れる災厄に対抗するために、世界各国の政府や企業は一丸となって手を組んだ。その結果生まれたのが、『メルクリウス』という、攻魔騎士を管理・育成するための国際機関

である。

『メルクリウス』に属する攻魔騎士達は、悪魔から世界を守るために命懸けて戦い続けた。人類と悪魔の闘争は熾烈を極め、多くの命が散ることとなったが——
今から五十年前。

戦争は——人間側の勝利で幕を閉じた。

太平洋に浮かぶ烏島カラスジマという名の無人島で『悪魔王』サタタチを滅ぼしたことにより、全ての悪魔が灰となって消滅し、以来、日付変更線より悪魔が現れることはなくなった。

もう、日の昇る方角からの脅威に怯える必要はない。

誰もが待ち望んだ、平和な時代が訪れた。

戦後五十年、『メルクリウス』は様々な戦後復興活動に取り組んだが——その中で最たる成果を上げたものが、『ソードウォウ』である。

攻魔騎士同士が武器を手に戦い合うバトルエンターテイメント——『ソードウォウ』は、今や世界で最も多くのファン人口を誇る格闘競技となった。世界最高峰と謳われるEリーグのトッププロともなれば、年収ウン十億という選手もザラに存在する。

年に一度、烏島で開かれる高校生（U18）大会の最高峰——『祓魔祭』も、トップリーグに負けず劣らずの人気と観客動員数を誇り、多くの学生がその舞台を目指して日夜鍛錬に励んでいる。

リザ・クロスフィールドも、その一人である。

いや、一人だった、というべきか。

「一年で結果を出せなかったら——一年時に「祓魔祭」に出場できなかったら、もう二度と家の決定には逆らわない」

そう豪語して実家を飛び出して来た彼女にとっては、今年が最初で最後のチャンスであった。だが、彼女の夢と野望は、あまりにも早い段階で潰えてしまった——

「……………」

気がつけばリザは、女子寮の自室に戻ってきていた。

どうやって帰ってきたのかほとんど覚えていない。放送部や野次馬が、敗北について根掘り葉掘り尋ねてきた気もするが、全てうろ覚えであった。

後ろ手でドアを閉め、手に持っていた魔機剣はその辺に立てかける。

控え室にも寄らずにきたため、格好はG Pスーツのままだった。適当に脱ぎ捨てて全裸となり、フラフラと安定しない足取りで浴室へと向かう。

給湯温度を高めに設定し、熱いシャワーを頭から浴びて試合の汗を流した。

と言っても、大した汗はかいていないが。

「……………」

最低の試合だった、と思う。

全力を出したわけでも、死力を尽くしたわけでもない。歯車が噛み合わぬまま、エンジンに火が入らぬまま、いつの間にか試合が終わっていた。

「……なんで」

滴る水滴と共に、唇から無念が零れていく。

「なんで、どうして……こんなはずじゃ……なんで……？」

リザは深い混乱から未だに立ち直れずにいた。頭を埋め尽くすのは、自分の全てを否定したような嘲笑だけ――

「阿木、双士郎……なんなのよ……なんなのよつ、あいつは……っ！」

おのれ
己を下した男の名を叫び、ダン、とシャワールームの壁を叩く。

油断してなかった、と言えば嘘になるだろう。

過去の実績や資質検査の結果を見る限り、なにもかもが最低ランクの男だった。いやに目を引く不気味な白髪以外、特徴も特筆すべき点もない。実際に相対してみても、強者特有のオーラなどは全く感じなかった。

しかしリザは、そのどう見ても強そうに見えない男に――完全試合を喰らった。敗北。

それも、校内選抜戦、の予選会、の初戦敗退。

結果だけ見れば――最低以外のなにものでもない。



なに一つとして実績を残せぬまま、リザの一年度の夏は終わった。

「……………」

絶望的な状況にもかかわらず、どうにも絶望しきれない。消化不良な気持ちのまま、リザはシャワーを止めて浴室から出た。

バスタオルを手にとつて体を拭いていく。

顔を拭き、髪を拭き、全身を拭き、最後に湿気が溜まりやすい乳房の下の部分を念入りに拭いたところで——着替えを忘れたことに気づいた。

「あ…………。えっと、カーテンは閉めてたわよね」

バスタオルで体の前だけを隠すようにして、リザは浴室からリビングに向かう。水気を含んだ生地が肌に張り付き、肉付きのいい体が強調される。ある意味裸よりも卑猥な絵面となつてしまつたが、同居人もいない一人暮らしの女子寮の自室ならば、なんの問題もない——はずだったのだが。

「よオ」

「…………へ？」

いるはずのない者が、部屋にいた。

我が物顔でリビングのソファでふんぞり返っているのは——阿木双士郎。

ほんの数十分前に、リザから全てを奪い去つた男。GPスーツから着替えてはいるが、似た

ような黒ずくめの私服。日本人としての最低限のマナーか、靴はきちんと脱いでいる。

唐突過ぎる来訪者——いや侵入者に、リザが硬直したことは言うまでもない。

「また会つたな、馬鹿おっぱい」

バスタオルを纏つただけのリザの裸体を目撃しておきながら、双士郎は狼狽えることもなく、不敵な笑みを漏らすだけだった。

「…………ひっ。い、いやあ——ぶっ！」

真っ白になつていた頭がようやく現状を理解し、侵入者に対する恐怖と羞恥から悲鳴をあげそうになるが——その寸前、顔面にクッションを投げつけられた。

「騒ぐな。みつともねえ」

「…………くっ！ な、なにやってんのよ、あんた!?!」

「なにつて、不法侵入？」

悪びれもしない双士郎。

あまりのふてぶてしさに、リザは頭が沸騰しそうになる。

「心配しなくても、お前の貞操が目的じゃねえよ。そのだらしねえ体が目的なら、古典ホラーよろしくシャワー中に襲いかかつてたさ」

「だ、だらしがない!? 私の体が…………だらしなですって!?!」

「体脂肪率20パー弱つてどこか? デブじゃねえが、アスリートにしちゃ少々肉付きがいい方

だな」

「じ、自慢じゃないけどねっ！ け、けっこういい体してるはずよ、私は！ 女友達から『脱いでも脱がなくてもすごい』って褒められたこともあるし……グラビアのオフアーだって、全部断ってるけど、何十回もあったんだからっ！」

「どうでもいいけどよ、あんまり熱弁振るってるよ、いろいろ見えちゃうぜ？」

「~~~~っ！」

「ククク。まあ、そこまでご自慢の裸体を見せてえっつーなら、お望み通りましたっぷりと堪能してやっても——ぐあっ！」

ヘラヘラと笑う男の顔に向けて、先ほど投げつけられたクッションを思い切り投げ返す。

「変態っ！ 変態っ！ この……変態の早漏野郎っ！」

続けて、置き時計、ぬいぐるみ、雑誌と、近くにあったものを手当たり次第に投げつける。

双士郎が仰け反った一瞬の隙を見て、リビングを駆け足で横切り、着替えの入っているタンスの元へと向かう。

同年代の男の前を、バスタオル二丁で、尻丸出しで駆け抜ける。

羞恥心で顔から火が出そうになるが、リザは歯を食いしばって恥辱に耐えた。下着と部屋着を取り出し、猛スピードで脱衣所へと戻る。「おーい、ブラとパンツが揃ってなかったけどそれでいいのーか？」という冷やかしを無視して、大急ぎで着替えを済ます。

衣服を身につけ、現代人としての尊厳と慎ましきを取り戻したリザは、バン、と勢いよく脱衣所のドアを開いた。ズンズンと大股で双士郎へと詰め寄り、

「なんなのよ、あんたは!？」

と、烈火の勢いで叫んだ。

「なんで私の部屋にいるの!? どっから入ってきたのよ！」

「玄関からだよ」

「げ、玄関……」

「敗戦のショック引きずってるのはわかるけどよ、シャワー浴びんなら鍵ぐらいはかけときな。不用心にも程があるぜ」

「……っ。だ、だからって……勝手に入ってきていいことにはならないでしょ。よくも、よくも私を辱めたわね……！ 絶対に許さないんだから！」

「ククク。そうカッカすんなよ。他の奴に見られたくなかったから忍び込ませてもらったが、俺の目的は覗きでも下着ドロでもねえ。他の奴に見られたくなかったから忍び込ませてもらったが、

「話？ ふんっ。変態と話すことなんてないわよ！」

「いいのーか？ そうやって意固地になつてると——地獄から抜け出すための糸を取り逃がすことになるぜ？」

相手の言葉に耳を貸すつもりはなかった。

問答無用で部屋から締め出そうと思っていたが——しかし、双士郎がポケットから取り出したものを見て、リザの表情が変わる。

「とりあえず、こいつは返しとくぜ」

そう言ってテーブルにバラバラと転がしたのは——六発の魔弾だった。

魔弾。

形状やサイズは普通の弾丸と大して変わらないそれは、魔力増幅装置である。

悪魔に対抗するために生み出された兵器であり、人類の叡智の結晶。

適合者は各々の魔力性質に応じて様々な超常現象を引き起こすことができるが、魔機剣に装填した魔弾を消費することで、その威力は、何十倍にも跳ね上がる。

『ソードウォウ』の場合、高校生の大会では一試合六発までとレギュレーションが定まっており、魔弾を用いた大技をどのタイミングで使うか、が重要な戦略となる。

「これ、私が使ってる魔弾と同じ……え？ あれ？ でも、返すって……」

困惑するリザに対し、双士郎はこれみよがしにため息を吐いた。

「察しが悪いにも程があんだろ。今までどれだけ平和な世界で生きてきたんだ？」

「う、うるさいわねっ。いいから、ちゃんと説明しなさいよ。どうしてあんたが私の魔弾を持ってるの？」

「すり替えたからだよ」

双士郎は言った。

恥じることもなく、堂々と。

「すり替えたって……ま、まさか——」

「ようやく気づいたか。ああ、そうだよ。今日の試合の前に——お前の魔弾をすり替えたのさ。中の触媒が劣化してて使い物にならねえもんとさ」

恥ずかしげもない、それどころかむしろ誇らしげな不正行為の告白。

リザは驚愕して目を見開いた。怒りよりも、信じられないという気持ちが強かった。

「……お、おかしいと思っただよ。試合のために発注した六発の魔弾が……全部、良品だったなんて」

先の試合、リザは魔弾を一発も使わなかった。観客や実況はそのことを不思議がっていたが、なんのことはない、使いたくても使えなかっただけだ。

試合中、何度引き金を引いても魔弾は反応しなかった。数多の敵を葬ってきたリザの雷撃は、発動することさえできなかったのだ。

運がない。装備のチェックを怠った自分のミス。そう思っただけでどうにか自分を納得させようとしていたが——まさかそれが、対戦相手による卑劣な罠だったなんて。

「いったい、どうやって……」

「試合前によ、控室に係員が来なかったか？」「初戦に限り装備のチェックを行います」とか

言って」

「き、来たわよ」

相手の言う通り、試合開始時間の少し前に帽子を目深に被った男がやってきた。この学園ではそれが慣例なのかと思ひ、リザは素直に自分の魔機剣を渡したが――

「そいつは俺だ」

「……は？」

「ククク。このみっともねえ髪も、こういうときには役に立つんだよな」

そう言つて、肩まである白髪をかき上げるようにする双士郎。

彼の異様な白髪は――否が応でも人目を引く。

有り体に言つて、悪目立ちする。

不自然に白い髪と、それを強調するような黒ずくめの服装。オセロの如きモノクロームの風貌は、見る者全てに不気味な印象を植え付ける。

あまりにもわかりやすい、外見的特徴。

しかし――裏を返せば。

そのわかりやすい特徴が消失すれば、途端に彼だと認識しづらくなるというのだ。

人間が相手を識別するとき、頭髮は非常に重要な要素となる。髪型と髪色が変わっただけで、人の印象は大きく変わる。

「カツラと帽子被っただけの雑な変装だから、注意深く観察したら気づいただろうが……ククク、試合前で緊張していたお前は、相手が俺だと気づかぬまま、まんまと自分の得物を渡しちまったってわけさ。世間知らずのお嬢様を騙すのは楽でよかつたぜ」

新入生であるリザは、聖海学園の校則やルールには疎い。そのことも計算した上での作戦だったのだろう。用意周到で抜け目のない作戦だと言えるが――しかし、卑劣な畏であることに変わりはない。

「ふ、ふざけないでよ！ こんな……反則じゃない！ こんなことが許されると思つてるの!? 恥を知らないさっ！」

「クカカツ。騙される方が馬鹿なんだよ」

睨みつけたリザを真つ向から睨み返し、獐猛な笑みを漏らす双士郎。

「……この件は、すぐに先生達に報告させてもらうわ。そうしたら、さっきの試合はあんたの反則負けになるはずよ」

「無駄だ。序列入りが出てくる本戦ならともかく、予選での物言いなんざ、教員連中も相手にしねえ。確たる証拠でもあれば別だろうが……俺は割と几帳面な方だな。証拠隠滅には細心の注意を払つた。今更お前がどんだけ騒ごうが、結果は変わらねえ」

「……っ」

「そもそも、だ。この程度の畏にハマつてる時点で話にならねえんだよ。上の方に行けば、エ

ゲツなさはこんなもんじゃねえぜ」

「上の方……？」

「『祓魔祭』……『悪魔王』が討伐された烏島で、年に一度開催される『ソードウォウ』高校生世界大会。本場欧州のEリーグと比べれば当然レベルは劣るが、『学生しか出場できない』十代の若者が青春の全てを懸けて戦う」などの付加価値のおかげで、プロリーグと負けず劣らずの人気を誇り——結果、莫大な経済効果を生む。となれば……表には出せねえ陰謀や悪巧みが横行するのも必然だろう？ 盗聴、盗撮、買収、八百長、談合、薬物混入、誹謗中傷の拡散、相手の武装への細工などは日常茶飯事。事故を装った闇討ちや、家族を人質に取った脅迫なんかもあつたっけな」

「そ、そんなことがあるわけ……」

「表沙汰になった事例だけでゴマンとあるさ。表沙汰になってねえのを考えると……ククク、どれほどの名プレイヤーが、世間の闇に吞まれて消えたんだろうな？」

リザは言葉を失ってしまふ。

『祓魔祭』は、武の祭典。

悪魔の消滅と人類の繁栄を祝う、年に一度の記念式典。

世界中の学生騎士の憧れであり、聖地でもある。

その輝かしい舞台の裏に——想像もつかぬほどに暗い世界があつたなんて。

「お前が今まで汚え世界を見ずにこれたのは……実家であるクロス社の力だろう。大事に大事に箱入りで育てられたお嬢様は、華々しい世界しか見ることが許されず、そのせいでとんだ甘ちゃんに育っちゃまったってわけさ」

「だ、誰が甘ちゃんよっ」

「甘ちゃんだよ。今日の試合、お前の敗因はひとえにお前自身の甘さにある」

「違うわよ！ あんたが、汚い真似をしたから——」

「確かに俺は汚え策を用いた。けど、それを許したのはお前の甘さだ。一流の攻魔騎士ならば、試合前に他人に得物を渡すようなへまはしねえ」

「……っ」

「それに、だ。本来なら——魔弾に細工したくらいで、お前が俺ごときに負けるはずがねえんだよ。俺とお前では、そのくらいスペックでの差がある」

双士郎は饒舌に続ける。

「お前は十年に一人の逸材と謳われるほどの女だ。攻魔騎士としての資質は極めて高く、バトルセンスも申し分なし。一方俺は、どんな無能でも十分は続くと言われるフレアが、三十秒しか保たねえ最低の落ちこぼれ。俺みたいな雑魚は、お前なら魔弾なしで一蹴できる。違うか？」

「ソードウォウ」において、魔弾は勝敗を分ける重要な要素ではあるが——圧倒的な実力差

がある場合、魔弾の有無など意味をなくす。リザも中学生時代、明らかに実力が劣る者を相手にした場合は、魔弾なしで勝利したことも何度かあった。

しかし、今日の試合では――

「中学時代、お前は自校でのホームゲームではほぼ十割の勝率を誇っていたが、これがアウェイとなるとやや勝率が落ちる。慣れない環境による不安や緊張が原因だろう。そういう状況でお前は――必ずと言っていいほど、試合の初めに魔弾を消費した大技を発動し、リズムを作るうとする」

「なっ……」

リザは啞然とする。

双士郎が口にしたそれは――彼女自身も気づいていないことだった。

無意識のクセ、だったのだろう。

「高校での初めての公式試合……お前にとっちゃアウェイと同じだ。だからいつものように魔弾で派手な技を見せつけようとして、引き金に指をかける……」

しかしその結果は――不発。

対戦相手の、卑怯な工作のために。

「魔弾の不発にお前は大きく動揺する。俺はその隙を突いて、お前の左手の『的』を破壊した。その奇襲攻撃が成功した時点で――もう勝負は決しようなもんだっただぜ」

凶悪な笑みを深くしながら、双士郎は続ける。

「類まれなる実力と才能を持つお前は、劣勢や逆境での試合経験が極めて少ない。常に優位で戦うことに慣れ切っているせいで、たまに相手に先制されると大きく動揺し、失点を取り戻そうとムキになり、その結果驚くほど動きが悪くなる。中学三年間、公式記録に残っているお前の敗戦はたったの四回だが――その全てが、相手に先制された試合だ」

魔弾は発動しない。

先制は許してしまっ。

焦りと混乱に囚われたリザは、一旦距離を取って体勢を立て直し、装備の不具合を確認しようとするが――

「そこでまた、強者特有の弱点が露見する。雷撃と剣技を主体とした攻撃一辺倒のスタイルで戦い、圧倒的火力と高機動で相手を封殺する戦法を取ってきたお前は、回避や撤退に慣れていない。バックステップで逃げる際、一瞬首を回して後方を確認するという致命的な傷がある」

リザが双士郎から目を離して背後を確認した瞬間、バックステップの蹴り足であった右足の『的』は、狙いすましたかのように破壊された。

「クタク。後はもう消化試合さ。『的』で二点以上差をつけられた状態からお前が挽回した試合は過去に一度もない。想定外のアクシデントの連続で、お前の混乱と焦燥はピークを迎える。そこで俺はダメ押しとばかりに、魔弾を用いてフレアを発動。早漏の俺は三十秒しか保たねえ

が、頭が真っ白になったお前の残り三つの『的』を壊すには、二十秒とかからなかったぜ」

「……ちょ、ちよつと待ちなさいよっ！」

リザは思わず声を上げてしまう。

「な、なんで……？　なんでそんなに、私のことに詳しいのよ……？」

すると双士郎は大きく息を吸い、そして一気に言葉を吐き出す。

「リザ・クロスフィールド。『ソードウォウ』関連用品の開発・販売で世界的なシェアを誇る大企業、クロスアヴァロン社の創始者の孫。父はクロス社の現代表取締役、ウーゼル・クロスフィールド。七月七日生まれ。身長一五九cm。体重は非公開放だが、おそらく五十前後。血液型はB型のRH（-）。適合者資質——カテゴリA、魔力タイプ——属性変化系。現在の使用リボルバーリボルバー、天照社製「雷風の導き手ジルクア」。昨年度の欧州U15大会の覇者であり、そのときの功績が認められ、『メルクリウス』より『閃雷』の二つ名を授かる。好物はチョコレート系の菓子。嫌いなものはレモンティーと爬虫類。十歳で『ソードウォウ』を始め、以降目覚ましい活躍を見せる。欧州の学生大会では常に優勝争いに加わる実力者。可憐な見た目も相まって高い人気を誇るが、大変な負けず嫌いでも有名。十二歳のとき、とある大会の決勝で敗退した後、約三十分その場で泣き喚き続けたことがある。隠れた趣味は『日本のアニメ鑑賞』。日本語は主にアニメで覚えた。コスプレにも興味があり、様々なアニメの服を購入しては自宅で一人ファッションショーを開いている。人前に出ることも検討しているがなかなか踏ん切りが

つかず、妥協案としてコスプレ衣装の上にコートを羽織って夜の街に——」

「わーわーわーっ!？」

絶叫するリザ。叫ばずにはいられなかったのだ。

「なんなの!？　本気でなんなの!？　あんた、私のストーカーっ!？」

「ストーカー?　クク、ナメんな——それ以上だよ」

獐猛な笑みは、誇らしげに告げる。

「今日の試合のために、お前のことは調べ尽くした。昨年の欧州中学生覇者だけあって、探せばいくらでも情報は手に入ったよ。公式戦の記録や映像はもちろん、ファンが勝手に撮影した動画や画像、諸々の雑誌記事、あちこちのSNS……このご時世、ちよつとしたスキルさえあれば、地球の反対側のことだろうと全部筒抜けだ」

「な、なによ、それ……」

徹底した敵情視察。

その恐ろしいまでの執念と陰湿さに——リザはゾツとした。

対戦相手の成績や映像を見て、そこから相手を分析して戦術を組み立てること自体は、極めて普通のことだ。

だが——目の前の男のそれは、明らかに常軌を逸している。

弱点を探すのではなく、その者の全てを掌握するような——

「……『ソードウォウ』は、お互いの積み上げてきた『強さ』を競い合う、神聖な格闘競技よ。それなのに……ストーカーまがいのこととして、卑劣な小細工で相手を貶めて……あなた、そんなことして勝って、楽しいの?」

「楽しいねえ!」

苦悶に満ちた声に対し、双士郎は全く間を置かずに即答した。

唐突にソファから立ち上がり、リザへと顔を寄せて瞳を覗きこむようにする。

ドス黒い欲望を秘めた双眸。

闇を見つめたような。

闇を煮詰めたような。

あまりに暗く鋭い眼に、リザは危うく悲鳴を上げそうになった。

「お高くとまった天才様が、凡人以下の俺にハメられて潰される。最高だよ……最高以外のなんだっつーんだ。どっちが強いだの、どっちが弱いだの、くだらねえ勝負ごっこに夢中になってる馬鹿どもを出し抜いてポコポコに凹ませてやるのが、俺みてえな無能にとっちゃこの上ない愉快なんだよ……ククククク、クカカカカカカーッ!」

タガが外れたような哄笑。なにもかもを見下すようでありながら、端々に痛烈な自虐が滲む。高らかに、しかしどこか自暴自棄に笑う男に、リザは心から恐怖した。

(なんなのよ、この男……)

フェアブレイ精神など欠片もなく、向上心など微塵もなく、なりふり構わず、手段を選ばず、恐ろしいまでの執着と執念で勝利だけをもぎ取る。

『ソードウォウ』という競技を愛し、ひたむきに鍛錬を積んできたリザにとっては——目の前の男は、完全に理解の外にいる生き物だった。

「……この早漏野郎。あなたは、最低の男よ!」

「ククク。そりゃどうも。だがお前は、そんな最低の男に負けたわけだ。しかも完全試合で。脆いもんだな、お前の積み上げてきた『強さ』っつーのはよ!」

「う、うるさいっ!」

「聖海学園の校内選抜戦では、予選で一敗でもした奴が本戦に出ることはまずない。全勝者だけが本戦に出場するシステムだ。つまり、お前の夏はもう終わったってわけだ!」

そこまで言ったところで、双士郎は顔を玄関の方へと向ける。視線の先にあるのは、捨て置かれていたリザの魔機剣——天照社製『雷風の導き手ジルクエア』。

「お前がなんのために留学してきたのかは知らねえが……ま、大手メーカーであるクロス社の令嬢が、当て付けてみてえにライバル企業の装備を使つてるところを見る限り、大方の予想はつくけどな。あれだろ? レールに乗った人生はまっぴらごめんだ!、的なやつ? ククク、羨ましいねえ。一度でいいから、そういう贅沢な悩みを抱えた人生を送ってみたいもんだ!」

「……あなたに、私のなかがわかるのよ!」

リザの声は怒りで震えていた。両の拳を、強く強く握り締める。

「羨ましい、ですって……うちの家族のこと聞いたら、二度とそんな口は利けなくなるわよ。私の父はね——」

「そうか。大変だったな」

「そう、大変だったのよ——って話を聞きなさいよ!？」

あまりにも適当な返しに、思わずノリツツコミをしてしまいうりざだった。

「生憎、他人の不幸自慢や自分語りには興味がなくてな。お前の戦う理由なんざどうでもいい。俺にとつて重要なのは——お前に戦う理由があるかどうかだけだ」

「ど、どういう意味よ……」

「言っただろ？俺は、お前に糸を垂らしに来たんだよ。イギリスの中高一貫校から、面倒くせえ手続きしてわざわざこの学園に来たんだ。なにかしら、ここで戦わなければならない事情があんだろ？ だったら——個人戦の他に、チーム戦つー可能性も、まだ残ってるんじゃないか？」

「『祓魔祭』には——二種類の戦いがある。

一対一で争う個人戦。

そしてもう一つは、四対四のチーム戦だ。

(チーム戦……)

考えもしないことだった。

チーム戦では言うまでもなく、チームワークが物を言う。入学してまだ日が浅いリザには、背中を預けられるほどに信頼できる仲間はいないし、仮にそんな仲間を見つけれたとしても、リザの戦闘能力に合わせられる者がいるとは思えない。実力のある上級生の大半は、昨年からチームを作り、この夏に向けて連携を磨いているからだ。

そのためチーム戦のことは最初から考えもせず、個人戦一本に絞っていたのだが——

「まさか……あんたと一緒にチームになれていいの?。」

「おう」

「冗談じゃないわよ！誰があんたみたいな奴と組むもんですか!」

「ククク。いいのかよ？相手や手段を選んでる余裕が、今のお前にあるのか?」

リザは言葉に詰まり、歯を食いしばる。そんな彼女を押しに眺めながら、双士郎は一步前に出た。

大きく手を広げる。

鳥が翼を広げるように、あるいは悪魔が翼を広げるように。

「黙って俺に従え、リザ・クロスフィールド。そうすりゃ、お前を『祓魔祭』の頂点へと連れてってやる」

白髪の下、妖しい輝きを秘めた双眸がリザを見下ろす。こちらの全てを見透かすような眼光

は言いようのない圧力を伴い、息苦しさを感じてしまう。

リザの望みを断ち切り、絶望の淵へと追いやった男が、今度は望みを繋ごうとしている。掌を返して、手を差し伸べようとしている。

状況が全く理解できない。

理不尽な流れに飲み込まれ、脱出不能の渦の中に閉じ込められたような。

阿木双士郎という男に、利用され、翻弄ほんろうされる——

「……なにが……なにが目的なのよ、あんた？」

絞り出すように問うたりザに、双士郎は囁う。

「俺は今年の『祓魔祭カクニバル』で、個人戦とチーム戦の両方で優勝を搔かつ攫さらい、完全制覇を成し遂げる。そして——」

双士郎は言う。

「——このクソみてえな世界を、思いっきり虚仮こけにしてやる」

◆ 試読版はここまでとなります。続きは今月発売の本編でお楽しみください。